

六月に入り、梅雨入りしました。これからしばらくは、じめじめした空気と蒸し暑さに耐えないといけません。

皆さま、いかがお過ごしでしょうか？

昨年十月から勤まっております本願寺の伝灯奉告法要が、五月末日で十期八十日間を終えました。新しい専如ご門主は折に触れて現代社会における宗教の役割や教団としてのこれからの方向性について示そうとされています。

生活環境の変化に伴い、ひとの精神性も変化してきました。団塊の世代以降の自己実現に重きを置く人々に対して、仏教の出発点である自らの足りなさや、愚かさ気付かせることはなかなか難しいことです。そういう精神的な土台を造るためには、まずはお寺とのご縁をつくらなければなりません。お墓参りはしていても、本堂に参ったことのない若い世代は少なくありません。お葬式やご法事など、自分の親族など大事な人とのご縁がつくる法縁が出発点となります。お経だけではなく、ご法話を聴く機会をお持ち頂きたいですね。

行事予定



六月十八日 ヨガの会

七月十二日 まこと会 夏法座

午後一時半より

講師 住職 飯田通暁師

★夏法座終了後 役員会(親睦旅行について)

七月二十一日 ヨガの会

八月五日 原爆速夜法曹

於 原爆ドーム横 西向寺

午後七時半よりお勤めの後

平和公園供養塔まで提灯行列

(参加は申込不要です)

春季永代経法要が勤まりました

五月二十五日(木)・二十六日(金)

講師 富島昭圓師

本願寺派布教使

昨年に引き続きご登壇頂きました。

伝灯奉告法要を機縁にして、浄土真宗を受け継いでいく私たちの生き方についてお話頂きました。昨年使いました本をお持ちいただいた方も多く、皆さまのご協力に感謝申しあげます。



【春季永代経法要 坊守覚え書き】

*念仏いただく私たちの生き方

浄土真宗は何もしない宗教と言う人がいます。何もしないでも救われるのだから何をしても良いのだらうと逆手にとった物言いをする人もいます。「他力本願」という言葉がそのように間違つて捉えられるためと考えられます。

他の宗派と違つて浄土真宗は戒律がありません。何をしたから救われるとか何をしなかったから救われないなどという条件がないのです。それでは、何もせず、何も考えず、ただただ時を過ごせば良いのでしょうか。決してそのようなことはありません。親鸞聖人が示された平生業成の教えを通して、往生が決まっているからこそその生き方を前門主様は示唆されていますし、この度の伝灯奉告法要に際して、新しいご門主様も親鸞聖人が門弟に宛てられたお手紙から示唆されました。

仏さまの願いに応える人生を歩みましょう（即如前門主）

平生からずつとお念仏続けて臨終にあたってやつと阿弥陀如来さまのお迎えを得て救われると言う考え方ではなく、平生、今ここに信心いただく身となつて往生・成仏が定まり、命の根本問題が解決される

のです。それは、今のいのちが阿弥陀如来さまの光に包まれていると
言うことです。そのお慈悲に応え、報いる人生を歩まねばなりません。

仏さまのみこころにかなう生き方をいたしましょう（專如門主）

私たちは自分の思い通りにならないことで悩み苦しむ自己中心性を
持っています。それを仏教では無明煩惱と言います。阿弥陀如来さま
はそのままの姿で救うと働きかけてくださっているのに、それに気づ
かず、お任せできない、よろこべない愚かさを持っています。

私たちは、阿弥陀如来さまのご本願を聞かせていただくことで、自分
本位にしか生きられない無明の存在であることに気づかされ、できる
だけ身を慎み、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服する生き方へ
とつくり変えられていくのです。それは例えば、欲を少なくして足る
ことを知る「小欲知足」であり、他者に穏やかに接する「和顔愛語」
です。仏さまのような執われのない完全に清らかな行いではありません
が、仏法を抛り所として生きていくことで他者の喜びを自らの喜びと
し、他者の苦しみを自らの苦しみにするなど、仏さまのお心になら
う生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

凡夫にあぐらをかいて何もしないのが他力ではありません。